

私の見た日本留学事情

史 蹟*

1. はじめに

1993年に日本に留学し、学位をとってから後、大学の教員として働いてきた中で、当然のことながら、多くの留学生の教育や研究指導、外国人研究者との交流を行ってきた。今回のミニ特集で与えられたテーマは「優秀な外国人留学生や研究者を日本に招いたり、国際連携を進めたりするために何が重要か」ということで、この機会に幾つかのことを考えてみた。

2. 外国人留学生や研究者を日本に招く必要性

私の理解としては、日本の教育・研究現場の活性化のために、外国人留学生や研究者の招聘は重要であると考えている。日本は技術先進国であることは世界中で認められている。言うまでもないが、その裏に東洋と西洋文化の融合でできた独自の教育システムは強力な支えになっている。特に、第二次世界大戦後、人口の増加、経済の高速発展、技術力の備蓄などによって、教育・研究の現場が活性化され、多くの優れた人材、優れた研究・開発成果を社会に提供でき、技術進歩に大きく貢献したと考えられる。しかし、80年代末からの経済発展の停滞、人口の減少、生活水準向上などによって教育現場にも多くの影響が出てきている。よく言われているのは以前と比べると学生の競争意識、ハングリー精神、挑戦意識の低下などがあると思う。一方、不景気や国際化などの影響で、社会的に競争が益々激しくなっている現状の中、これは明らかに矛盾した状況である。

日本の高い競争力を維持するために、大学の活性化は大きな課題になってきている。その方策の1つは優秀な留学生を招くことである。留学生を大学院入学、勉強、研究、就職などいろいろな場面で競争に参加させ、教育・研究現場の活性化を図る。日本政府は既に、2008年に「留学生30万人計画」を打ち出している⁽¹⁾。これは2020年を目途に、留学生の総人数を30万人まで増やす計画である。現在、日本の大

学・大学院在学生の人数はおおよそ280万人なので⁽²⁾、この目標を実現できれば、在学学生10人に1人が留学生の割合になり、教育・研究の現場に大きく影響を及ぼす人数になると思われる。

3. 現状はどうなっているか

振り返ってみると自分が留学してからの18年間余りの間に、日本の留学事情が大きく変わったことに気がついた。国際化や日本周辺の国の経済発展によって、留学生を受け入れる環境、留学生自身の構成などが大きく変わった。1つの例としては、以前より留学生を支援するプログラムが多くなってきたことが挙げられる。例えば、グローバルCOEやリーディング大学院などがある。それ以外に私のいる大学には国際大学院というプログラムもあり、英語の講義を多く開設し、日本語のできない留学生も勉強・研究ができる環境を築いてきた。これらのプログラムの経済的な援助などで多くの優秀な留学生や若い研究者が日本に来られるようになり、勉強や研究に専念でき、よい成果を挙げることができるようになった。私の周りにもこれらのプログラムの留学生が多くいるが、ほとんどの学生は積極的に勉強、研究に取り組んでおり、日本人学生に良い刺激を与えている。輪講や勉強会などを英語でやる研究室も増えている。また、独立行政法人物質・材料研究機構では、様々なプログラムにより外国人研究者の比率を上げることで、研究アクティビティーが向上することが相関性調査の結果で明らかになっている⁽³⁾。つまり、外国人留学生や研究者は日本の教育・研究の現場の活性化に貢献できると考えてよい。

もう1つの変化は、多くの留学生が日本で就職できるようになったことである。私が留学していたときによく言われたことは、アメリカは移民の社会なので、留学生が就職しやすいが、日本は異なり、留学生の就職は大変難しいということだった。しかし、最近は様子が変わって、大手企業を含む多くの企業が積極的に留学生を採用するようになった。これは経済活動の国際化の影響だと考えられる。つまり、今の時

* 東京工業大学教授；材料工学専攻(〒152-8552 東京都目黒区大岡山 2-12-1)
Current Situation of Overseas Students in Japan—View of a Former Foreign Student—; Ji Shi (Graduate School of Materials Science and Engineering, Tokyo Institute of Technology, Tokyo)
Keywords: *foreign students, globalization, revitalization of educational sites, human resource*
2012年7月10日受理

代、日本の企業にとって外国語のできる、外国の事情のわかる留学生は役に立つ戦力になっている。これを象徴するように2009年と2010年の留学生就職ビザの許可人数は1万人を超えていて、10年ほど前の3倍以上になっている⁽⁴⁾。

4. 優秀な外国人留学生や研究者を日本に招くために何が重要か

この問題は簡単なようで実は複雑である。日本の社会、企業、大学および外国人留学生自身の各方面の努力が必要になる。つまり、留学生と大学、留学生と日本の企業、留学生と日本の社会、これらの関係はどれもwin-winの関係(双方に良い結果をもたらすこと)にならなくては、日本に来てもらえなかったり、長く続かなかったりすることは言うまでもない。日本は技術先進国だけでなく、独自の文化もある。例えば、マンガや、ファッションなどは世界中の若い人の中で大人気になっている。また、安全、安心、自然の豊かな国としても知られており、若い学生が留学するのに魅力のある国になっている。一方、公用語は英語ではない、生活コストが高い、地震などの自然災害が多い、といった不利な面もある。したがって、まず、留学生に日本の魅力を感じさせ、日本の特徴を生かすことが重要なことである。あくまでも1つの例だが、例えば理工系の学生に日本の「ものづくり精神」を身につけてもらう。これは難しいことで全ての学生にはできないと思われるが、成功例が増えれば、確実に文化的な特徴になる。先日、中国広東省の人材招聘大会が東京で開かれ、広東省の担当者の冒頭の挨拶では、日本での留学経験者は全体的に仕事を着実に進めるといった特徴があると評価していた。少し地味に思われるところもあると思うが、最近このような評価は中国国内でもよく聞くようになった。

次に留学生に対しての観念を変えなければならない。「留学生30万人計画」の前の「留学生十万人計画」の留学政策には文化交流や国際協力、あるいはアジア等の諸外国への知的国際貢献のようなスタンスがあったが⁽⁵⁾、(また結果的にそうなっているという状況でもあったが)現在はむしろ留学生が自国の利益になる人的資源として考えなければならない状況になってきた。しかも、この資源に対する争奪戦は先進国の間ですでに始まっている。この争奪戦で勝つためには、大学だけではなく、政府や産業界の協調的な対応が必要になる。

三つ目は「出口」の支援が必要である。留学で勉強した成果を誰でも生かしたいものである。日本留学の成果を生かし

たい場所はやはり日本と考えられる。実際、留学生の6割強が日本への就職を希望している。近年、大学などでは、多くの留学生就職支援部門や組織ができてきている。留学生の就職率も2005年頃の18%程度から、30%程度まで上昇した。しかしながら、それでもなお、就職希望者の3人に1人しか就職できない状況である。日本の大学生と大学院生の平均的な就職率(60%前後)と比べると依然低いのが現状である⁽⁶⁾。もちろん就職できないのには、様々な理由があるが、留学生にしてみれば、苦労して日本に留学に来て、希望の職に就くことができず、win-winの状況にできていないと考えざるを得ないであろう。これからも留学生の人数がさらに増えると思われるが、責任を持って「出口」の支援が必要になると考えている。

最後に留学生だった私から今の留学生の皆さんに一言アドバイスしたいと思う。最近、留学生が多くなって、各国の留学生が自分たちのコミュニティを作るようになった。これは必要なことだが、この中ばかりで活動しているは日本留学の意味が大分薄くなる。ぜひ留学中から日本人と多く交流し、日本の文化と社会の理解を深め、最大限の留学成果を収めてほしいと思っている。

文 献

- (1) 「留学生30万人計画」骨子の策定について：http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/07/08080109.htm
- (2) 平成21年度学校基本調査速報 調査結果の要旨, http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/08121201/1282588.htm
- (3) 有賀克彦, 蒲生秀典：外国人研究者の寄与による研究機関の生産性の向上, 科学技術動向, (2012) No 3・4, 10.
- (4) 「平成22年における留学生等の日本企業等への就職状況について」：<http://www.moj.go.jp/content/000077277.pdf>
- (5) 栖原 暁：「留学生30万人計画」の意味と課題, 移民政策研究(2010), No 2：<http://www.iminseisaku.org/top/contents/090516ms2s.pdf>
- (6) 教育機関のための外国人留学生就職支援ガイド：<http://www.ajinzai-sc.jp/pdf/shuushokushien.pdf>



史 蹟

★★
 1997年3月 東京工業大学大学院理工学研究所博士後期課程修了
 2002年4月 東京工業大学大学院理工学研究所助手
 2004年1月 東京工業大学大学院理工学研究所助教
 2012年4月 現職
 専門分野：金属物性, 磁性薄膜
 ◎ナノヘテロ構造薄膜の磁気特性に関する研究に従事。現在、磁性金属と窒化物、酸化物の層状構造の界面状態、応力などと磁気特性の関係の研究を中心に取り組んでいる。

★★